



## 斜鼻変形に対する整容・機能改善を両立・最大限化する 鼻中隔外鼻形成術アルゴリズムの検討

Treatment algorithm for septorhinoplasty to optimize aesthetic and functional improvement of crooked nose

渡辺頼勝

Yorikatsu Watanabe

城本クリニック 立川院

Shiromoto Clinic

### ■抄録

#### 【目的】

斜鼻の治療は、整容性の問題のみならず鼻腔通気機能障害を伴うことも多く、斜鼻原因の正確な診断と鼻中隔・鼻形成術のあらゆる技術の集約が必要とされる。斜鼻変形には、外鼻形態のみの改善で十分な場合から、鼻腔通気機能障害と外鼻形態の双方の改善が必要な場合まで、実に様々な程度のもが含まれているため、機能と整容の改善を両立しつつ最大限化する系統的な鼻中隔・鼻形成術アルゴリズムが不可欠である。今回、斜鼻に対する最近の鼻中隔・鼻形成術アルゴリズムによる治療成績を検討した。

#### 【方法】

術前に斜鼻変形と鼻腔通気機能障害を伴い、顔面 CT 画像上、鼻中隔彎曲を伴う場合には、Open approach で鼻中隔矯正術を行い、鼻背軟骨および鼻中隔軟骨、鼻翼軟骨変形による軟骨性斜鼻を spreader graft や suture technique などを用いて改善する。最後に骨性斜鼻を鼻骨骨切り術などで改善する。一方、術前に有意な鼻腔通気機能障害を伴わず、顔面 CT 画像上、鼻中隔彎曲を伴わない場合は、Closed approach で骨性斜鼻を鼻骨骨切り術などで改善した上で、さらに斜鼻変形が残存する場合には、Open approach による軟骨性斜鼻の改善を行う。対象は、過去 3 年間で斜鼻変形治療を受け、3 カ月以上経過観察し得た症例とした。患者写真から骨性斜鼻、軟骨性斜鼻の程度を簡便に計測・評価できる斜鼻指数：Crooked Nose Index(CNI) を算出し、術前・術後の形態評価に用いた。

#### 【結果】

解析対象は、23 例（男 13, 女 10, 平均年齢 31.3 歳、平均観察期間 11.6 カ月）であった。斜鼻形態は術前 CNI:16 ± 6.8、術後 3 カ月以上の最終 CNI:4.9 ± 3.4 であり有意な改善が認められた ( $p < 0.001$ )。鼻腔通気障害は全例において改善した。

#### 【考察】

斜鼻の治療は、外鼻変形の改善のみのインプラントやフィラーによる治療では鼻腔通気障害の悪化などが危惧され不十分であり、良好な結果を得るには、斜鼻変形の正確な診断と、整容と機能の改善を両立し最大限化する系統的な鼻中隔・鼻形成術アルゴリズムによる治療が不可欠である。

### ■Abstract

Treatment of the crooked nose has to be addressed conjointly with both aesthetic and functional (airway obstruction) improvement. Here we introduced our recent treatment algorithm for the crooked nose by aesthetic septorhinoplasty. In case of CT study with septal deviation, open approach was selected to correct bony and cartilaginous deformity using osteotomy and various types of cartilage grafts such as spreader grafts. In case of CT study without septal deviation, closed approach firstly was selected to try to correct bony deformity. If there was still deformity, open approach was selected to correct residual cartilaginous deformity. Using this algorithm, we successfully treated 23 patients of the crooked nose with both aesthetic and functional improvement.